

27P-pm03

日本における薬剤師職能変化と医薬分業

○赤木 佳寿子¹ (¹一橋大院社会)

【目的】「薬剤師とは何か。薬剤師の職能とは何か」については日本の薬剤師が職能を最大限に発揮するために明らかにしなければならない課題である。薬剤師の職能が大きな変化を遂げている昨今、それを明示することは重要であり必須の課題である。本発表においては医薬分業をとりあげ、日本においてなぜ医薬分業が近年進展したかという視点で薬剤師の職能の近年の変化について検討し、薬剤師の職能とは何かを解明する手掛かりを得ることを目的とする。

医薬分業は経済誘導によって進展したと語られることが多い。しかし、発表者は経済誘導が真の要因であるとすることを疑問視する立場に立つ。その根拠のひとつとして、米国においては19世紀に入るまではほとんど処方せんでの調剤が行われず医師の自家調剤であったが20世紀以降に医薬分業という概念を用いずに処方せん発行率の上昇が起こっていることが認められることを指摘する。日本においては医薬分業を行うために経済誘導を行ったと考えるよりも、処方せん率を上げるべき要因あるいは上がっていく要因があり、そのために経済誘導を行ったのだと考えるのである。発表者は、その要因こそが薬剤師に求められた職能変化であり、日本では「医薬分業」という概念を用いて薬剤師の職能変化に対応したとの仮説を立て、それを検証する。

【方法】歴史的分析を用い、医薬分業の進展と薬剤師に求められる役割とを丹念に照らし合わせていく。

【結果および考察】日本の「医薬分業」は1990年代を境にその意味が変わっており、これを分けて考えるべきである。後者こそが薬剤師に要求された職能変化に関わるもので、ファーマシューティカルケアといった理念も関連している。